
in vitro garden

扇花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

in vitro garden

【Nコード】

N2491BA

【作者名】

扇花

【あらすじ】

水芝鴉>みずしばときくに途方もなく愛されて育った、真砂千誉
>まさごちほくの恋愛観はとても拙い。歳の差13歳。

1・マヨヒガ

彼女はマヨヒガを持っていた。

その家は朽ち果てるための道のみを辿り、彼女はそれを留める気もさらさら無く、唯、時ばかりがその二つを撫でて行過ぎていた。

天を見上げると飛白の雲が、ほんのりと端の方を覆っている。

「晴れだなあ、」

どんな季節であっても、ここは彼女にとつともなく優しい。

病院だろうが学校だろうが、単なる洋館だろうが。

「呪いの」と謳い文句が幾らでも付く建物たちが、日々の侵入者によつて無粋に汚されていく。黄色や赤や青のスプレーは万国共通で味気ない。

けれども彼女のこの土地は、それらの逆洗礼を一度として受けたことがなかった。

見るものをその圧力で退去させる、唯の家屋。

時に居丈高に、時に全身の産毛が逆巻く位の恐怖でもつて、千誉以外を完全に拒絶した。

逆行で真っ黒な雀が飛び去った。彼女のちょうど真上である。頭の真上の青空が、一等青いとよつく知っているからか、小さな鳥は余計に真っ黒い。

ざわわ、

ざわわ、

ゆったりと大風が吹いた。二度。髪が散乱して、視界に簾を作る。年老いた薄が折れそうに痛ましい。千誉は若い薄の方が好きだっ

た。直立に近くすつくりと立ち上がっていて、品の良い金色の穂が猫のように滑らかに輝く。まだ巻きついている面積のほうが多い緑の葉から茎を抜くときの、きゅっ、という瑞々しい音と言ったらない。名残惜しいのに潔い、とても清潔な音だ。

かといって、千誉はやたらと抜いて遊んだりする女でもなかった。

ざわわ、

ざわわ、

廃屋も千誉も薄も一緒くたに靡かせる大風は、この朽ち行く土地の中でもっとも香り高い白木蓮の枝も遠慮なしに揺らした。

・ ・ ・甘あい匂い。

水棲でないことが不思議な木だ。

さわわわわ、

小さく長い空気の動き。

「甘あい、」

すべての花の中で何よりも愛しい匂い。どれもよりも愛しい花。彼女の基準の中心の花。

佇む蕾は小鳥の如く。香る蜜は水の如く。白色の柔らかいこと。花びらの優しい丸み。

『良いかい、』

幼い千誉の、今よりずっと出来立てに近い、柔軟な鼓膜を存分に震わせたあの声。

『良いかい、千誉。』

『はい。トキさん。』

きれいな黒い髪が額から目蓋と頬に影を落としていた。

『あの木蓮のね、』

伸びた指は庭に腰を据えた白木蓮の、硬い硬い幹を指していた。

『似合う男にだけ惚れなさい。』

『トキさんよりも？』

そんな人はどこを捜したっていやしないことを、彼女はちゃんと知っていた。

『無理かな。』

『無理だよ。』

伏せられた睫毛も真っ黒だった。均一に、些かの撓みも無いひたすらに真っ直ぐな、あの睫毛。一本残らず下向きで、更に眉根を寄せて思案する顔。その愛しくもとても分かりやすい苦悩の様子を、

何より間近にした彼女の、

『トキさん、』

・・・ねえ、トキさん、トキさん、

薄っぺらい胸はどうしようもなくなってしまった。

『あたし、二番目を三番目を選ぶわ。』

『二人も？』

『だって、足さなきゃトキさんには追いつけないもの。』

本当は幾ら似合っていたって、どんなに沢山足してみたって、

・・・トキさんが一番。

覆りはしない。

『それから、あたし、』

決めたの。

彼女はいつでもトキの膝に座っていた。腿や尻の下、布越しに彼の体温がじんわりと刷り込まれていくのが、とてもとても好きだった。

『何を決めたの？』

髪を梳かれ、少女はうつとりと瞬いた。頬を指先で撥られる。先を促す際に彼が行う仕草だ。勿論千誉だけに。

『教えて、千誉。』

額にトキの頬。

・ ・ ・ きもちいい、

『トキさんの睫毛と、似てなきやだわ。』

どんなに木蓮が似合っていたって。

『トキさんの睫毛を思い出せなきや、駄目なの。』

ねえ、トキさん。

『なあに、千誉。』

『トキさん、トキさん、』

どこもかしこも、彼が少女に触れなかった場所はなかった。触れ逃す事を、彼女が許さなかった。

『トキさん、』

11の彼女は心から心から、告げ続けた。そうして、木霊のように、否、それ以上に降ってくる彼からのすべてを享受した。

「似てるの。」

伏せた睫毛の形。白色の花が似合うところだって、勿論。生憎と三番目を探さずに、二番目だけで事足りたのだけれども。

「けど、ねえ、」

トキさん。

愛しげに、事実心底愛しく思っ庭木を見上げる。青へ続く堅固な幹。和毛に覆われた額を捨てきれない蕾。既に開いて見せた花びら。

・・貴方とここで交わした全部は、

誰ともどこでも、一生、交わしきれない。眠って夢を見て、幸福だと信じて、

・・ましてや、

愛、だとは、

「トキさん、」

・・口が裂けても。

夜に近しい藍色が、天上まで迫っていた。宵の明星は月に少しばかり近い。太陽光を反射するあの衛星の明るさは、近づく星をきれいにかき消してしまう。添え星にはなかなか会えるものではないか

ら。

「かーえろ。」

ぎし、

勢いよく立ち上がると、縁台はぱらぱらと木屑を撒いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2491ba/>

in vitro garden

2012年1月6日11時45分発行